



TITLE:

屋根概説(六)

AUTHOR(S):

[藤]田, 元春

CITATION:

[藤]田, 元春. 屋根概説(六). 地球 1926, 6(4): 287-296

ISSUE DATE:

1926-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183169>

RIGHT:

屋根概説 (六)

文學士 藤田元春

一一、板葺

現在北陸の山手の町又は海岸地方もしくは東國の彼方此方に石をのせた板屋が多く残つてゐる、これは茅葺と同時に最初は我國の帝都にもあつたもので、齊明天皇の皇居は實にこの板蓋であつたから御所の御名を飛鳥板蓋宮と申してある、續日本紀神龜元年十一月甲子、大政官奏に

有京師帝王爲居萬國所朝非是壯麗、何以表德、其板屋草舍、中古遺制、難營易破、空彈民賊、請仰有司、令五位已上及庶人堪營者^二構立^一瓦舍、塗爲赤白^二奏可^一之。

とあり、東大寺正倉院文書にも板葺屋の勘注文がでゝゐるのでこの板葺か奈良の都に多かつたことを證し得らるゝが、奈良のみでなく勿論田舎にもこの板葺が、檜皮葺または草葺と共に存したことは大日本古文書、伊賀國阿拜郡拓植郷舍宅墾田賣買券によりて明にすることを得る、曰く

小治田藤鷹解、申立賣買舍宅并墾田券事

家一區地貳所在阿拜郡拓殖郷

中略

屋捌間

一間葺檜皮板敷 一間葺草 一間葺草 一間葺草 一間葺草 二間葺板
長四丈 長四丈六尺 長二丈四尺 長一丈五尺 長二丈九尺 長四丈

下略 天平廿年十一月十九日戶主 小治田朝臣藤麿

これは當時奈良の左京三條四坊に在住した小治田氏が自己の所有せる、伊賀阿拜郡拓殖（今阿山郡拓殖）の墾田を錢七拾貫で賣つた券であつて、其墾田の中に屋八軒があつたらしい、八軒のうち檜皮でふいたのが一軒、草で葺いたのが四軒、一軒は板葺であり二軒は破れてゐたらしい。面白いのはこの中二軒には板敷とあるから家の中に板敷があつたので、多くの民家は草舎で土間に莚をしてゐたものらしい、とにかくこの券面でみると一軒の民家は板屋であつたとは間違がない。

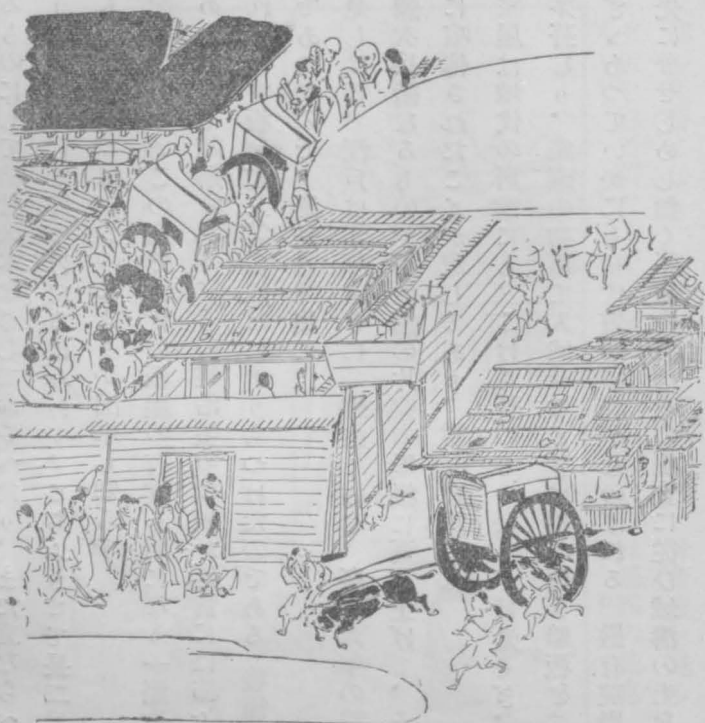
其後平安朝になつても恐らく同様で寢殿にさへ草葺があつたものである、板葺もあつたであらう。

大日本史料四編第二に文治三年の三寶院の古文書がのこつてゐて、左の句が見出された。

蓮花院、堂一字檜皮葺、雜舍板葺、三間二面、成覺寺三間四面板葺

なぞゝ出てゐる。そこで附圖第三十七、一遍聖繪圓伊の筆と稱せらるゝものを見ると其様子がわ

かるこれは建治七年閏年四月十六日上人四條京極釋迦堂に詣るといふ詞書のある部分である、これを見ると時代は鎌倉西紀千二百七十年頃の京都の町屋が猶樽の桎板を用ひた板屋であつたことが證明される、ずつと下つて延寶四年（西紀一六七六）丙辰六月吉日祇園及御旅所圖といふ扁額が八阪神社にかゝつてゐるのを見ると當時四條通は多くは柿葺コミツの町屋となつてゐるが、猶小石をのせた板葺の家が其間にあり、神社の西門を出た北側、祇園村といった邊は、まだ多くの草葺農家が建つてゐる。して見ると板葺が近世まで京や、大阪の町家であつたことは疑ふべくもない事實で地球五卷四



一圓聖繪・伊賀建治年間京極四條

號に拙稿、京都市内に現存せる古代の聚落の中に詳述したことを訂正する要を認めぬ、蓋しこの板葺は獨り京大阪に限らず、徳川初期の江戸も同様であつた、近世日本世相史の著者は

武家草創の世、慶長中江戸城を修めし時は城廓櫓堀にこそ、幾分の留意を以て建築したれ、殿中は極めて質素を旨として大廣間より大奥まで皆茅葺簀簾床にして殊に表向は皆板壁板敷なりしがその後寛永の改造にて大柳營とある、中略

町瓦葺は稀にて多くは綴葺とて板の厚を重ねふけりとある。

又同じく天保頃の人である松岡行義の後松日記卷五(百家説林續篇)には

板屋はむかしは大なる板を、よこさまにならべてかづらの様な

るものにして結付又木などしておさへたり、また立ならべたるもみゆ。

うす板を釘して打つけたるはみぬす、とちぶきとて長二尺ばかり、厚五六分ばかり幅三寸斗の板もてふくことはいつのよりか出来し知らず

と記してゐる。この文で古代の板屋の有様も明になり一遍聖繪の繪にある板屋の上に木や石のせてある理由も諒解される、この建治頃の板屋が延寶には柿ぶきにかはるのであるが、柿葺になるとそれはうす板を釘(木又は竹)にてうちつけたのである(後節參照)。實に江戸も亦最初は板屋草舎の町であつたので、慶長見聞集には

見しは昔、江戸は皆草ぶきにて焼亡しけじ、慶長六年の霜月二日の大火の後に、本町二丁目の瀧山彌次兵衛なるものが街道筋の片側の屋根に瓦を上げて、それで有名になつて半瓦彌次兵衛とて町中に喧傳されたことが記してあり、靈光夜話には

家屋は城代の居館にも、こけら葺のものなく、日光そぎ、甲州そぎを以てとりぶきにし臺所は全く茅葺なり、家康の初めて入城せるときは幅の廣き船板を二段に重ねて玄關の板敷に代へたりなごゝあつていかにも初代質素の昔がしのばれる。嚴有院殿御實記には、萬治三年令とて

先に令せしめし如く茅葺の家はその便宜に従ひ城溝の土を取つて速にぬるべし遅緩することなかれ。とある位だから、元來保守的な家宅が早速に改まらないことが、よくわかる。當時の江戸は草葺のある外にこゝに記されたとりぶき又は綴葺の屋根がある、同時に恐らく板屋もあつたであらう、守貞漫稿に



寛文頃の伏見京所載

武士の家は檜皮葺をつくらず皆板屋也
 とある、鎌倉年中行事にも遠侍は總て板屋也とあるこの板屋から變化したものが江戸草創の世に
 は綴葺といふ屋根になり、それが又三變して中古以來は瓦葺となつたのである。守貞漫稿に
 京都の瓦葺となりたるは中古以來のこと、骨董集を見るに京都の店は、板大略長三尺許幅五寸の
 そぎ板を以て葺たるが、屋上に石を置たるは暴風の備也

とある、この文と後松日記
 の文とを併せ考へる時は昔
 は實際長い板を以て屋根に
 したことを知り、やがては
 板を短かくし幅を狭くし、
 分を薄くしたので綴葺屋根
 といふものになつたことが
 わかる。
 守貞のこの時代に板は長三
 尺もあるから、そぎ板と云
 へども薄くもなかつた、實
 にこれは過去の板屋から、
 綴葺に移りかはりの屋根で

ある、寛文頃（西紀一六六五）に猶この種の板屋が京都にもあつたので京雀の圖には『ふし見』のこの屋根をしるし、大佛八まん町邊にも同様の屋根がしるしてある、延寶五年（西紀一六七五）菱川師宣のかいた江戸雀の水代島八幡宮の圖にも草葺の外に同様の屋根をみうける。

西鶴織留、伏見里質商人の條にも

取葺屋根の輪のひくきを作事して瓦ふきに白かべ、京格子をつけゝればとある

取葺即、屋根板を重ね合せてふき、横木をわたし、釘のかはりに石にて押へるために或は輪を設ける、輪とは竹で石のころばぬ用意であるが、輪にしないで縦横に木又は竹を置くこともある。この例は現在でも北越地方の民家町家に多く見らるゝ所である。現今特建で古への板葺の名残と見るべきは静岡濱松五社神社の屋根でそれはこの幅のひろい搏板が並べふいてある、但し石はのつてゐない、栃木縣芳賀郡益子町高館山西明寺の建物の中で、特建の三重の塔は、方三間の大さで、屋根は堅板葺である、この兩者の如きは古い板屋の極上乘のものであらう、或書には日光そぎ甲州そぎなどといひ芋殻ふきとて木を芋殻のごとくわりさき結び束ねて葺く也とあれども、これは疑はしい、芋殻葺なるものは越前で麻木アサギといつて草葺の屋根の棟に用ひてゐる、草葺の一種であるから板屋でない、板屋の方は昔は長さ一間幅一尺もあり厚二寸餘もある搏板を用ひたらしいのは、かの西行物語繪卷や一遍聖繪の板屋を見て了解し得らるゝが、それも時勢の下るにつれて、この搏板の材は、長さも漸次短かく幅も厚さもうすくなつて來た。故に守貞漫稿には板の長三尺許幅五寸と記したけれども、後松日記の著者は長二尺ばかり幅三寸ばかり厚五六分と記してゐる、蓋し古の搏板を短か

第三十九圖



寛文頃の京都柿苺と卯建

るのであつた、附圖三十九は京雀にのつてゐる京都麩屋町の圖であるがこれは三十八圖伏見の石をのせた板屋根とは趣がちがつてゐて家と家との間に卯建があり（切妻の章参照）棟は板の雁振りがのせてあつて屋根はこけらふきであるらしい、近世風俗志に

なるを三都共に屋根板といふ、次第にかさね、木釘を以て打をいふ、其音聲によりてたゞきやねといふ予の少年の頃はへぎ板葺といへり、江戸にてはこけらふきといへり

とあるのがこれである。蓋しかゝる一尺内外のへぎ板を用ふことは現今瓦葺の下地に、昔と同じく用ゐるので、古い人はこの葺方を樽葺クラヰキといふが、現在の京都では上に土を居ドくから土居葺ドヰキとも又はモタセヤネともいふてゐる、全く瓦下であるから餘程粗末ではあるが、もし瓦をのせないで、茶室の底などへぎ板のみで葺く際には、これを柿葺カキヰといつて板も上等にする、葺脚も短くつめるのである。併し瓦下のモタセヤネである場合には上等で長さ九寸、幅は三寸内外、厚さは一寸の厚味の板を十三枚におろしたものを用ゐる、維新以前は長さ一尺二寸もあつたが、今日は九寸が八寸になりそれを一寸脚にかさねる。安普請になると日本の杉板でなくて、いやに御齒黒のやうに臭い米杉を用ゐ、しかも四五寸のふき脚にして、竹釘を用ひないで、鐵釘にする、鐵だと三年目に腐つてしまふ、竹ならば二十年間大丈夫ださうなが今日の借屋建はそれよりもまだ不親切で、桎目のへぎ板の代りに、丸太杉の削り板を用ひるこれをツキ板といふ、とにかく當座だけ持てばよいといふ意味で、もたせ屋根といふらしい、澆季の世であると思ふ、これは京都の瓦や某氏の直話である。

瓦をのせないで、丈夫な片木板ヘギの屋根は實にこの古の綴葺より進歩したものであつて、それは江戸時代の中頃から都鄙共に流行し今日に及んでゐる。予の生れた丹波の山奥では、神社と酒屋の屋根が、このへぎ板ぶきである『京都府愛宕郡大原村字魚山の三千院はこの入母屋單層こけらぶきであつて檜皮葺の代りをなしてゐるし、高知縣長岡郡西豊永村豊樂寺の樂師堂島根縣能義郡宇賀莊村清水寺本堂、鳥取縣西伯郡大山村大山寺阿彌陀堂、京都南禪寺の金地院、京都府丹後久美濱古神谷の本願寺本堂、福島縣石城郡内郷村白水の阿彌陀堂など特建にしてこの柿葺は甚だ多い。故に板屋な

るものは日本民家の古い形式であつて其分布は廣いから、北越地方特有の聚落様式であるなど、考へてはならぬ、たゞ其現存することによつて其地の文化或は富の程度がまだ瓦葺になる程進歩してゐないといふことを知るべきである、即ちその古い屋根が其地に永續してゐる原因の中には或は人文的の事情もあり或は歴史的の理由もあるであらうが、主として經濟地理上の理由によることは疑ひを要しないことである、假令は

東北秋田縣等に板屋の多いのは、瓦にすると普通の瓦は冬期凍て破れる、或は雪が多いから雪づれがする、故に瓦が用ひられぬなどゝの説明をきくが、それよりも土地に多い材木が廉く自ら材料が豊富など云ふことが最も有力な原因であらう。

一二、杉皮葺と竹屋根

何れにしても日本の屋根のあらゆる種類が近畿に殆んど網羅されてゐるのは、注意すべきことで、丹波の山奥で杉林の多い所では杉皮葺といふものが瓦葺よりも多く用ひられる、葺脚は二三寸の短かさにして非常に分厚にしたのがある、しかし其簡單なものは過去の板葺の板を皮にかへたに過ぎないものもある、これなども經濟地理上の一現象と見るべきであらう、板屋に類似せるものとしてここに附記する。

つぎに板葺に類似したもので杉皮ぶきよりも面白いのは竹の屋根である、近畿では竹の名産地たる葛野乙訓邊の民家で其の小屋、便所の類に竹屋根があつたが、それは過去のことである、今日は殆んど見當らぬ、それでも不思議に京都市田中町、それは最近迄田舎であつて、農科大學の裏手の田中神社

の傍らに今も昔を偲ぶ茅葺の民家が一聚落をなしてゐる所がある、その一民家牧喜右衛門氏は古の庄屋格で妻入大和棟の茅屋を有し、その門がこの竹屋根を有してゐる。先日この宅を尋ねてこの竹屋根の門は何時こしらへたかと聞くと、主人が云ふに今年七十を越した祖父さへ其起源をしらぬ餘程昔からのものである、私の家も古い家で多くの柱が見らるゝ通りチョンノハツリでそれに板が

はつてある。しかもこの曲つた柱は逆木が用ひてあるこ

とこの通りだと案内してくれられた、いかにも古い民家であるが、この田中村最古とも思はれる家の門が附圖第四十の如く竹を牝牡交互に重ねて長さ五尺ばかり、切妻流れ造りにしてある竹の留めは釘を用ゐてゐるが、昔の竹屋根は釘を用ひないで縄でしばつたものである。

民家を全部竹でふくのは今日では主として九州竹林の多産地にのみ残つてゐる現象で、熊本縣阿蘇郡宮地町附近では竹の徑三四寸もあるのを、半分に割つて節をぬき長さ一間程にきる其一端に切込をつくつて瓦棧の木を通

第四〇圖



京都田中町牧氏門
竹屋根屋

すやうにしかける、奥行四間の家ならば、前面、二段後面二段のしころぶきにして屋根になる、竹は牝牡交互に仰伏せしめる、屋根の末端には押へ縁をつけて屋根裏からこれをしばるのである、遠く見れば丁度瓦の本葺のやうな腰折れ屋根になるのである。近年この屋根も少なくなつてきた。(未完)